

奇術研究の地平

伊藤 優

1. 本論文の目的と構成

本論文は「奇術」を対象とした研究のサーベイを目的としている。とはいえ、「奇術」研究は必ずしも宗教学の中で固有の問題領域を確立しているわけではない。宗教学や人類学においては「呪術」との関わりの中で問題化されることが多く、正面から「奇術」を問うてきたのは芸能研究や文化研究の領域であった。しかしながら、「奇術」は「マジック」や「魔術」と呼ばれることから明らかなように、一般の用法における magic が指す領域の一部を占めている。また、人類学の分野においては、呪術者が奇術を演じて見せる、呪術自体に視覚的トリックの要素が見られるなど、呪術のリアリティに関わる問題としてトリックの問題が存在している。「奇術」について問うことは、これらの重要問題を考える手がかりとなるのである。

本論文ではこのような問題意識のもと、以下のような構成をとる。まずは西欧を対象とした研究として、宗教(史)学的なアプローチにおける奇術研究と、“secular magic”の語を用いた英語圏の研究を紹介する。次に、非西欧地域を対象に呪術との関連から奇術を扱う人類学の研究を概観する。最後に日本文化の中の奇術自体を対象にした芸能史と文化史・民俗史の研究を確認する。

なお、「奇術」は基本的にはイーミックな用語であり、その意味領域は時代や地域、文脈によって様々に異なる⁽¹⁾。本論文では呪術や魔術の領域との近接性を示しつつも、トリックを用いる芸のニュアンスから離れすぎない用語として「奇術」を用いている。しかしながら、それぞれの研究における「奇術」の用法は異なっており、例えば対象としている奇術が娯楽にとどまるのかそれ以上の何らかの意味を持つのか、といった違いが見られる。以下の議論では、その差異を明らかにするために、原則的にその研究者の語法を採用する。この作業を通じて奇術研究の地平の広がりをとらえるとともに、論点を整理したい。

2. 各分野における研究動向

2-1 宗教学における奇術 —近代科学と magic の交錯—

言うまでもなく、宗教学の分野では、「宗教」概念が、近代の歴史性を色濃く反映したもので、近代以前の世界や非西欧世界に直ちに適用できるものではないとして修正するための議論が交わされてきた⁽²⁾。宗教概念と複雑に関わりを持つ呪術概念についても見直しが進められている。この節では、呪術概念批判の研究動向の中で奇術がどのように問題化されるかを見ていく。

近年の呪術研究における重要な成果の1つが、『「呪術」の呪縛』⁽³⁾である。編者の江川純一と久保田浩による「はしがき」⁽⁴⁾では以下のように呪術をめぐる問題の現状を整理し、論考の目的を示している。

宗教概念批判は、その対立概念、劣位概念、類似概念として用いられてきた呪術概念にも影響を

及ぼす。「宗教」の語が religion の訳語としての性格を持つように、「呪術」は magic の訳語としての性格を持つが、magic は「呪術」だけでなく「呪法」「魔術」「魔法」「奇術」「まじない」「のろい」など様々に訳しうるもので、学問的概念にとどまらず様々な局面で用いられる。この点で、「呪術」の語に拘らず広く magic に該当する語について、概念史・学問史的研究が要請され、また多様な歴史的な事例を取り上げる必要がある。

また、「はしがき」の直後に載せられた江川と久保田の共著論考では、呪術（より正確にはそれを含む magic 概念）についての、学問史、日本における受容史、西洋宗教史・文化史を踏まえた上で、宗教学の動向との関わりを以下のように説明する。

あまり強調されることはないようであるが、これらの研究（引用者註：宗教概念批判を含む、ポスト・モダニズム並びにポスト・コロニアル批評の立場からの宗教学の自己反省的研究のこと）を通して得られた知見の1つは、宗教学の創成期において、近代的学問言説と近代的宗教言説とが未分化の状態にあったという洞察であると思われる。これは論者の観点からすれば、記述・分析のために宗教学が産出してきた概念装置——magic はその1つである——と、宗教学が対象とする過去と同時代のイーミックな言説との、相互補完的・相互形成的な関係の指摘だと言い換えることができる。したがって、宗教学との関係に絞って言えば、本論文集はこうした学問的概念再検討の議論と成果を踏まえた上で、宗教学が使用してきた概念である magic（そして「呪術」「魔術」「妖術」等々）に着目し、それらの成立・普及・定着を、とりわけ近代的学問言説と近代的宗教言説との相補性という観点から検討し直すものであるとも表現できる。そして、こうした再検討において重要となってくるのは、近代の宗教学が magic と名づけることによって対象としてきた過去と同時代の〈magic 的なもの〉の歴史的再検討なのである。⁽⁵⁾

ここでは学問的言説と宗教的言説が相互補完的に形成される場として、〈magic 的なもの〉を検討していく重要性が指摘されている。この言葉通り、「奇術」を近代の宗教学と同時代の〈magic 的なもの〉として捉え、関連する言説やその受容のされ方を検討したのが、前掲書下巻に収録された久保田浩「近代ドイツにおける「奇術=魔術」——奇術とスピリチュアリズムの関係に見る〈秘められてあるもの〉の意味論——」⁽⁶⁾である。この論文は、19世紀末のドイツにおける奇術師とスピリチュアリストとの緊張関係を扱い、その言説における「学問」との複雑な関わりを問題化したものである。

久保田は、近代ドイツの奇術界を牽引したカール・ヴィルマン（1849-1934）の事例から、19世紀ドイツの奇術師が、霊的現象を仕掛けによって説明する啓蒙的性格をもち、実験（=実演）と再現可能性を重視する近代科学を支持していたと論じる。その一方で、奇術師は術や仕掛けの詳細を説明しないままに霊的現象を再現するので、本人以外には奇術なのか本当の霊的現象なのかを区別することは難しかったと指摘しており、ヴィルマンが霊薬の調合を頼まれた事例を紹介している。この両価的性格を持つ奇術を、久保田は「奇術=魔術」と呼んでいる。久保田はまた、奇術師が啓蒙をやめて、驚くこと自体が自己目的化（娯楽化）するとき、「奇術=魔術」から「奇術=マジック」へと移行すると述べている。

久保田が近代における〈magic 的なもの〉の1例として奇術を扱った結果、そこには近代科学

の前提と magic の装いとが交差する場としての「奇術=魔術」が見出された。この「奇術=魔術」の空間においては奇術と魔術を区別することは難しく、厳密な区別を図る場合でも、その基準は個々に異なっていた。概念論から出発したこともあり、「奇術=魔術」と「奇術=マジック」には比較的明快な定義が与えられている。他の地域や時代における奇術研究と比較を可能にするような定義や議論の枠組みを見つけるために、この定義は一つの有力な参照枠となりうる。

2-2 “secular magic” 研究

次に英語圏の magic 研究の中で奇術・手品の領域がどのように問題化されているかを見ていく。紙幅と能力の関係上、ここでは“secular magic”という用語を用いた研究のいくつかを紹介するに留める。その分野はカルチュラル・スタディーズ、人類学、科学史、演劇研究など多岐にわたる。

管見の限り、最初に“secular magic”をタイトルに冠したのは、英文学史、文化史研究者サイモン・デュアリングによる *Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic* である⁽⁷⁾。デュアリングは“secular magic”を「仕掛けによって作り出される、手品のショーや特殊効果の魔法」であり、「超自然との接触を真剣には主張しない」として説明している⁽⁸⁾。デュアリングは、初めに西欧における古代からの魔術の歴史を概観した上で、17世紀から19世紀の事例をもとに、近代文化の様々な面に“secular magic”が関わることを論じている。その議論は宗教史上の問題との関係など、狭い意味での宗教学的テーマにとどまらず、ショービジネスとしての確立過程、人種差別やオリエンタリズムとの関係、幻灯から映画に至るまでの視覚に関する技術の影響、文学との関係など幅広いテーマに及び、様々な角度から奇術について検討するものとなっている。

“secular magic”の用語を用いた、奇術・手品を対象とする研究は他にも存在する。奇術の科学教育における役割を論じたアル・ガイラニの論文や、オリエンタリズムとの関わりを中心に、アジア人の奇術師の事例を扱ったゴトー・ジョーンズの論文、ディケンズの奇術と執筆活動の関係性を19世紀ヨーロッパの奇術観や奇術と文学における語りの問題などから捉えたピッタードの論文などが確認できる⁽⁹⁾。デュアリングを含む、奇術を対象とした研究では、“secular magic”の語は、原則的には芸能・娯楽としての奇術を指す用語として用いられる。

この一方で、デュアリングを継承しつつも、技芸・娯楽としての奇術よりもはるかに広い範囲に“secular magic”を適用する研究もあり、ジョシュア・ランディーとミッチェル・セイラーによる *The Re-enchantment of the World: Secular Magic in a Rational Age* はその先駆的論集といえる⁽¹⁰⁾。ここでの“secular magic”は「再呪術化」論⁽¹¹⁾の中に位置付けられており、近代以降に宗教が後退してできた空隙を、合理性に適合しながらも自主的、自覚的に埋める試みとされている。“secular magic”は近代以前に宗教が関与した大きな領域を補うので、様々な分野に存在するとされており、それぞれの論者が科学、言語、空間、文学、救済論、政治などのテーマを扱っている。同論集には奇術を中心にした論考はほとんどないのが特徴である。この「再呪術化」論としての“secular magic”論は、イアン・A・カスパートソンやマシュー・シュルツに受け継がれている。カスパートソンにおいては、幸運や厄除の品々に関わる、モンリオール住民の「半分の真剣さ」（時と場合による信と不信の使い分け）を伴う日常的な実践を分析する理論として、シュルツにおいては、近代の現実との葛藤のなかで「大きな物語」が要請されることを説明する理論として、それぞれ用いられる⁽¹²⁾。

“secular magic”概念を用いた研究は、芸能・娯楽としての狭義の奇術の研究と、再呪術化論に

における世俗内的呪術の研究とに大別できる。これらの研究は、奇術を媒介項にして近代・世俗と呪術・魔術の2分法を乗り越える試みとして考えられる。その一方で、それぞれの研究の射程の違いが、これらの研究を包括的に考えることを難しくしている。

2-3 人類学における奇術 —呪術とトリック—

人類学における呪術研究では、呪術のリアリティや呪術師に対する信頼について考える際に、トリックとしての奇術の問題が出現する。この節では川田牧人、白川千尋、関一敏が編集した『呪者の肖像』所収の論考と、浜本満の「いかさま施術師の条件——治療実践における見掛けの構築について——」を元にその様子を確認する⁽¹³⁾。なお、これらの論文では、呪術との差異を示すために、「奇術」より「手品」の語がよく用いられているので、それに倣うこととする。

『呪者の肖像』は、2012年の論集『呪術の人類学』⁽¹⁴⁾の延長上に位置する。『呪術の人類学』は「呪術と日常」「言葉と行為」を手がかりに呪術のリアリティを考える論集であったが、そのあとがきにおいて、今後の課題は個別の呪者に着目した「呪者の肖像」を描くことだと示している⁽¹⁵⁾。

『呪者の肖像』の問題意識を、編者の1人である川田牧人は「序」において以下のように説明している。それまでの呪術研究では、呪術を社会的葛藤や富の不均衡などの解消手段として説明するなど、呪術でないものに還元することや、宗教や科学の領域を切り取った後の残余として説明することが行われてきた。このような研究では、呪術そのものを掘り下げることではできず、呪術から幅広い人間領域を照射する可能性も失われる。エスノグラフィックなデータの集積から問おうとしても、多岐に渡る内容をまとめる中で残余カテゴリー論に回帰してしまう。そこで、呪術を実践する個々の人物（呪者）に目を向け、個人の特性と呪術的实践との分離可能性／不可能性と、呪術への参加者が半ば覚めつつも専心する「半分の真剣さ」の問題を考えていく⁽¹⁶⁾。

同論集に収録された論文のうち、明確に「手品」という用語を用いた言及があるのは第1章の津村文彦と第8章の近藤英俊のものである。

津村の論文は、仏教徒が大多数を占める東北タイにおいて、バラモン教に由来する伝統医療家・民間宗教者（呪者）である「リシ」について、その信頼がどのように形成されるか、あるいは失われるかといったことを問うものである。「ホンモノ」の呪者として評価された人物を中心にしたこれまでの研究と異なり、「ニセモノ」とみなされた呪者を中心に扱い、呪者の「ホンモノ」／「ニセモノ」が判断される要因の分析を行うという特徴がある⁽¹⁷⁾。津村は、「ホンモノ」の呪術の一部として手品が学ばれている事例をもとに、期待によって成功が支えられる構造を呪術と共有するものとして、手品について議論している⁽¹⁸⁾。

近藤のものは、ナイジェリア北部の都市カドゥナにおける呪医の実践を扱った論文である。アフリカに広く見られる「伝統的」呪医は、金銭的利益の追求や外来の技術（他地域の呪医、イスラーム、キリスト教の知識、生物医療）の導入などの伝統医らしからぬ特徴をもつが、それを社会変化から説明した先行研究に対し、彼らの実践の持つリアリティやその基底にある構造に踏み込もうというのが近藤の研究である。近藤によれば、呪医は市場競争にさらされており、新しい呪術を学ぶ（「ホンモノ」を探す）だけではなく見せかけの技も複数取り入れることが有利に働く。呪者による手品は、この見せかけの技の1つとして議論される。これらの手品はいわば呪術の「ニセモノ」であるが、行為者が「ニセモノ」だと思っていなくても「ホンモノ」のような効果を発揮するのであり、

実は「ニセモノ」と「ホンモノ」はそれほど異なっていないと近藤は論じている。近藤の議論における手品は、呪者と呪術の「ホンモノ」と「ニセモノ」をめぐる議論の中で、両者の境界の曖昧さを示す事例として扱われている⁽¹⁹⁾。

津村と近藤の論文から、呪術をめぐるリアリティの研究においては、呪術を実践する人物に着目した時、トリックにより見かけを作り出すこと(手品)が検討課題として見出されていると言える。最後に、呪術の実効性と見かけの演出がほとんど不可分であると論じた、浜本の論を紹介する⁽²⁰⁾。

浜本はトリックによる見かけの演出と実際の効果が結びつく過程を、進化論に着想を得た文化のミーム(ミメシス)理論と、各文化における施術者と依頼者のニーズの複雑な応酬とによって説明する。前提として、呪術における見かけの演出(病気の治療において病原体として口に含んだ羽を吐き出すなど)は、先代の呪術実践者から伝承されるものであり、個人の創出ではないので、個人の意味よりも構造によって説明されるべきだと浜本は語る。その上で、見かけを伴う呪術の方が信頼を得やすいために、そのような呪術が自然選択されて存続していくと論じている。また、施術師が見かけを作ることと、依頼者が施術師の成功に期待することには循環構造があるという。見かけだけの呪術でも、依頼者は、自らの期待する効果を感じ取る。その様子を見た施術師は、自分の作り出す見かけに効果があるのだと確信する。施術師の呪術に対する確信は、依頼者の効果への期待を大きくする。このような循環構造が、見かけの追求を強固にしていると浜本は指摘している。

呪術師が手品を取り入れることへのアプローチに着目するとき、津村が各個人の期待から論じているのに対し、近藤と浜本は呪者同士の競争から論じているといえる。

これらの論者が「手品」と呼び習わすものにも微妙な差異がある。津村の扱う手品は、メインの呪術の前段階として信頼を得るためのものであり、それ自体に実用的効果が求められるものではなかった(この意味で日常語としての「手品」に近い)。これに対し、近藤や浜本における手品は、本来は効果が不可視であるが見せかけの演出で補強された呪術自体であった。

人類学では、呪術がどのように経験され、当てにされるのかという問いの中で、「手品」が問われている。人類学が対象とするフィールドにおいて、呪術と結びつかないような手品があるのか、ないとするれば逆に西欧近代の世界にはなぜそのようなものがあるのか(あるいは実は西欧近代にもそのようなものはないのか)という問いはまだ検討されていない。

2-4 芸能史と民俗史における奇術 — 日本文化の中の奇術 —

日本国内の奇術については、宗教学や人類学よりも、芸能史研究や民俗史研究など、広く日本文化を扱う研究に成果が見られる。ここでは、それらの研究における奇術の位置付けを確認する。

奇術の芸能史的研究は、見世物全般を扱う研究によって始められた。特に朝倉無声のものが代表的である⁽²¹⁾。その後は、やや散発的ではあるが奇術の歴史を対象にした研究書が出されるようになり、中でも松山光伸の『実証・日本の手品史』⁽²²⁾は、原史料に当たることで多くの通説を見直した点でそれまでの研究とは一線を画している。時代が前後するが、1997年に「日本の伝統的な奇術」が「和妻」として「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に登録されて以降は、奇術実践者にとっても、その資料集成と実態把握の重要性が増している。

これらの研究の多くは事実の真偽を確かめることから出発しているが、史料の乏しさと、事実が誇張されやすいという奇術とそれを取り巻く文化の性格によって難航している。同時代の文化や社

会状況の中で「どのような意味が与えられたか」を主題にしているものは限られている。

奇術の芸能史的研究を網羅しつつ、事実確認を超える試みが見られるのが、河合勝と長野栄俊による『日本奇術文化史』⁽²³⁾である。河合は教育学を専門とする傍ら、奇術の実践者としても活動しており、奇術の教育への利用の研究や奇術についての資料収集を行っている一方、長野は福井県の郷土史料を扱う研究者であり、幕末から明治期にかけて活躍した奇術師の松旭齋天一が同地域の出身であったことから奇術研究にも携わるようになった人物である。同書は3部構成となっており、第1部が芸能としての奇術研究史のまとめと、幕末までの日本の奇術文化についての論考となっているため、この部を中心に扱う。なお、第2部は、江戸時代までの伝授本の演目目録と解説、第3部は一次資料となる伝授本自体の目録や用語集などから構成されている。

長野は実演された奇術の演目を整理した上で、芸能全体の歴史における相互関係や、各時代の担い手の身分とその活動場所についてなど、多面的に論じている。議論の対象範囲を確認するために、江戸中期の奇術観についての議論と、説話・物語における奇術表象についての議論を説明する。

長野は、江戸時代には奇術とまじないの類が未分化の状態にあったと指摘している。奇術伝授本に奇術の種明かしだけでなく、まじない、占い、科学的豆知識なども同時に載せられている事例や、逆に、占術の方法の解説本に占い師の説得力を高めるための奇術が解説された事例、薬商が奇術を行って薬の販売促進に利用した事例などが紹介されている。

物語における奇術表象については、「果心居士」、伝説的な忍者の「飛び加藤（加藤段藏）」、「キリシタン」⁽²⁴⁾らについての物語を元に、これらの伝説的・超自然的人物と奇術は、直接の関係はないが、表象上の連関が強かったと論じている。個々の人物の意味づけの違いや各作品の細かい成立過程の検証などは必要だが、現実の霊能者（江戸における占卜者・呪者や、近代ドイツのスピリチュアリストなど）だけでなく、フィクションの人物との関係を問題化する可能性が開かれている。

以上のように、奇術の意味を考えるという試みは、芸能としての奇術研究でも行われ始めている。ただし、奇術と関連する、占い、まじない、物語における奇術者には、それぞれに異なる歴史展開があるものと思われるが、そのような歴史性を踏まえて奇術の歴史展開を問い直すことは課題として残されている。『日本奇術文化史』は文化庁の「和妻」に関する助成金を受けて書かれた本であるため、演者が行った芸の内容の歴史があくまでメインであり、そうでないものを掘り下げるのは難しかったと思われる。「奇術」の枠組み自体を問い直すという仕事はまだ徹底されていないと言える。

芸能としての奇術の実態的研究の成果に依拠しながら、江戸時代や明治時代の日本の手品を妖怪文化の時代変遷との関係で捉えようとしているのが、香川雅信である⁽²⁵⁾。

香川は、江戸時代における妖怪文化の変容と並行する現象として手品の変容を扱っている。中世には、客観的事実（≒視覚的事実）を優位とする認識枠組みがなかったために、実際の手品師の行為とそれについて語られる内容とが分離されていなかった。目撃した人は大抵の場合、一連の手品の過程のうち、驚くべき部分についてのみ語るの、それを聞いた人は種や仕掛けの手がかりも掴めず、驚くことしかできない。このように、「語り」によって神秘性を保証された中世の手品を、香川は「幻術」と呼ぶ。これに対し、江戸時代における手品は、伝授本で種明かしされるなど可視のトリックによって保証されたものとなり、また現実と切り離された娯楽として楽しめるようになったとしている。これが妖怪手品の出現の前提となっている。

近代については、妖怪手品から催眠術への移行という図式で論じている。催眠術は原理が謎に包

まれており、人の心身に直接働きかけてその人の現実そのものを変容させるため、現実に影響せずトリックと仕掛けで見せかけを作る妖怪手品とは異なっているとしている他、その技術を学ぶことはできる点が幻術とも異なっているとしている。

香川の議論の中で、「妖怪手品」の語は、2通りの使われ方をしている。狭義には「視覚的に保証されたトリックによって妖怪現象を作り出すこと」という、江戸時代の手品のみが該当する概念として使われているが、トリックの条件を外して、中世の幻術、江戸の手品、近代の催眠術の全てを含む広い概念として使われることもある。この3者は妖怪現象によって繋がれているが、日本において妖怪現象を抜きに意味を持つ手品が存在するかどうかを問う余地が残されている。

芸能史と民俗史の両方の研究成果を生かし、「妖怪手品」を含む奇術文化の歴史を研究したのが横山泰子である。横山は、江戸時代から明治・大正期までの奇術・手品について、様々な角度と豊富な事例から検討している²⁶⁾。特に、奇術観とそれを形成する歴史的・社会的背景に注目しており、中国の仙術観と日本の奇術観の比較や、職業上の秘伝とその公開といった観点から、奇術、まじない、薬の関係を考察している。近代の奇術についても、西洋、科学、催眠術、スピリチュアリズムといった関連概念との関わりから捉えようとしている。さらに江戸川乱歩を題材に、文学と奇術との関わりについても論じている。横山は受容者の態度についての重要な指摘をしている。仕掛けがあると見るか見ないと見るか、仕掛けがあっても娯楽として肯定的に受け止められるか、取るに足らないものとして否定的に受け止められるかなどは、術の提供者だけでなく受容者の態度にも依存する。奇術の女王と呼ばれた松旭斎天勝(1886-1944)が病気の治療を頼まれた事例から、本人があくまで娯楽的な手品を演じているつもりでも、受容者が超自然的な力の発現として受け止めてしまうことがあると論じている。

日本文化における奇術研究は、主に江戸時代と明治・大正期について行われており、娯楽としての奇術を中心としつつも、歴史的・社会的背景や関連する文化領域との関係の考察が進められている。特にまじないや催眠術と奇術との境界領域について理解を深めることは宗教学の関心からも重要課題と思われる。そして、既存の宗教学の概念や理論と突き合わせて、その架橋可能性や見直しの可能性を考える必要がある。

3. 終わりに

奇術はその時代や地域によって、妖怪現象や催眠術、呪術、魔術など様々なものと結びついて意味を持つものとして研究されてきた。そして、研究者の関心や手法によっても切り取られ方が異なっていた。

大きく言えば、西欧を対象とした研究では、近代化、世俗化の中の magic の1形態として奇術が考えられており、科学や呪術 magic との関連が問われてきた。これに対し人類学の研究では、近代科学の前提が西欧ほど強力でない地域が対象となっており、とりわけ呪者の信憑構造との関係から奇術が問題化された。これらの研究と異なり、日本を対象とする研究においては、呪術的領域との関係で捉えられることはあっても、近代化と呪術的領域との関係や、呪者との関係については正面から問われていない。この原因の1つは、国外に目を向ける場合には、西欧流の宗教概念や呪術概念を用いることが研究の第1の手段となる一方、日本国内については、幻術、妖怪、催眠術などの

対象地域の用語をそのまま用いることが可能であり、無理に西欧由来の概念を持ち込むと歪んだ理解を生みかねないという懸念があるためと思われる。

今後は、各分野で生まれた概念や諸理論間の関係性の検討が必要になると思われる。例えば、以下のような議論を試みることができる。

近代ドイツのヴィルマンや、近代日本の松旭齋天勝といった奇術師たちは、霊的現象の偽物を作り、「ニセモノ」を「ニセモノ」として楽しませようとした（娯楽目的の手品を行った）。しかし、これらの時代には、スピリチュアリズムや催眠術の流行に見られるように、霊的現象を「ホンモノ」として捉え、実際の効力を期待する人々が多かった。彼らにとっては、奇術師たちの起こす現象も「ホンモノ」の霊的現象と変わらなかったため、奇術師たちに霊薬の調合や病気の治療を頼むこととなった。結果、手品が単なる娯楽として確立されることは難しかった。これに対して、江戸時代の日本では、妖怪現象をもちや実効性のある「ホンモノ」として捉える人は少数派であった。そのため、妖怪現象の「ニセモノ」を作る「妖怪手品」は、「ニセモノ」のまま楽しめることが可能だった。奇術・手品にはこのように「ホンモノ」と「ニセモノ」の間を揺れ動く性質があり、「ホンモノ」として参照される奇妙な現象に対する人々の態度が反映されている。参照される現象と態度は時代・地域・人々の立場など様々な要因によって変動する。

この議論自体が有意義な物になるかはこれからの検討次第である。しかし、異なる分野間の架橋を試みることは、奇術研究を進めるのみならず、各分野の自分にも示唆を与えると考えている。

註

- (1) 『国史大辞典』の「奇術」の項目は、「手品」を参照のこととされている（国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第4巻，吉川弘文館，1984年，80頁）。「手品」については、古代から中世にかけては「幻術」・「外術」が、江戸時代には「手品」・「手妻」がよく用いられたが、明治期以降に西洋手品と日本手品の統合を試みた帰天齋正一や松旭齋天一などの奇術師たちが「奇術」・「魔術」の語を用いたと述べられている（前掲書，第9巻，吉川弘文館，1988年，881 - 882頁）。『日本国語大辞典』の「奇術」の項目でも「(2) 巧妙な手さばきやしかけなどを用い，人の目をごまかして，不思議なことをしてみせる技術。てじな。てづま。」としての用例は1744年の例を除けば20世紀以降に見られることになっている（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第2版，第4巻，小学館，2001年，80 - 81頁）。これらを元にするると、「奇術」が「トリックを用いる芸」を指すようになったのは近代以降と考えられる。英語での表現については、『新和英大辞典』では「奇術 conjuring tricks; jugglery; (a)sleight of hand; magic」，「手品 magic; a magic [conjuring] trick; a sleight of hand; legerdemain; prestidigitation」などの用語が確認できる（渡邊敏朗，E. R. Skrzypczak, P. Snowden 編『新和英大辞典』第5版，研究社，2003年，683, 1788頁）。Oxford English Dictionaryによれば，magic, conjuring は魔術や儀礼と関わる意味を持つのに対し，trick は欺きのニュアンスが強く，a sleight of hand, legerdemain, prestidigitation は手先の早技というニュアンスが強い。Oxford University Press (eds.), OED Online, Oxford University Press, January 2020, <https://www.oed.com/>（2020年1月31日に閲覧）

- (2) 例えば、磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜：宗教・国家・神道』（岩波書店，2003）では、現代の「宗教」概念は、西洋近代のプロテスタンティズムの影響を強く受けており、プラクティスを下位に、ビリーフを上位に置く傾向や、公的な道徳と私的な宗教とを分ける考え方を無自覚に含んでしまっていることが指摘されている。
- (3) 江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛（上）』リトン，2015年；同編『「呪術」の呪縛（下）』リトン，2017年。
- (4) 江川・久保田編，前掲書，上巻，1-2頁。
- (5) 江川純一・久保田浩「「呪術」概念再考に向けて——文化史・宗教史叙述のための一試論——」，江川・久保田編，前掲書，上巻，36頁。
- (6) 久保田浩「近代ドイツにおける「奇術=魔術」——奇術とスピリチュアリズムの関係に見る〈秘められてあるもの〉の意味論——」，江川・久保田編，前掲書，下巻，317-354頁。
- (7) During, Simon, *Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic*, Harvard University Press, 2002.
- (8) Ibid., p. 1.
- (9) Al-Gailani, Salim, “Magic, Science and Masculinity: Marketing Toy Chemistry Sets,” *Studies in History and Philosophy of Science*, vol.40, 2009, pp. 372-381.; Goto-Jones, Christopher, “Magic, Modernity, and Orientalism: Conjuring Representations of Asia,” *Modern Asian Studies*, vol. 48.6, 2014, pp. 1451-1476. Pittard, Christopher, “The Travelling Doll Wonder: Dickens, Secular Magic, and Bleak House,” *Studies in the Novel*, vol. 48.3, 2016, pp. 279-300.
- (10) Landy, Joshua and Michael Saler (eds.), *The Re-Enchantment of the World: Secular Magic in a Rational Age*, Stanford University Press, 2009.
- (11) ランディーとセイラーは「再呪術化」論について、ウェーバーの提唱した「脱呪術化」論を修正して、近代社会においても呪術的現象が存在し必要とされることを示すものとしている。近代における伝統の復活としての「再呪術化」論と近代的な市場やメディアに対する人々の依存形態があたかも呪術的であるとする「再呪術化」論を既存の議論として説明した上で、両者と異なる第3の「再呪術化」論として“secular magic”論を提示している。
- (12) Cuthbertson, Ian Alexander, “Everyday Enchantments and Secular Magic in Montréal,” Ph.D. thesis, Queen’s University, 2016; Schultz, Matthew, “Revenant Modernisms and the Recurrence of Literary History,” *International Journal of English Studies*, vol. 17.1, 2017, pp. 1-15.
- (13) 川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店，2019年，浜本満「いかさま施術師の条件—治療実践における見掛けの構築について—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第12号，2010年，49-84頁。
- (14) 白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院，2012年。
- (15) 同上，310頁。
- (16) 川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店，2019年，1-6頁。
- (17) 津村は「ホンモノ」「ニセモノ」の語を，客観的もしくは自然科学的に効力を証明できるか否

かではなく、現地住民の態度に基づいて用いている。このような受容者の期待や信頼との結びつきのニュアンスを重視して本稿でも「ホンモノ」「ニセモノ」の語を用いている。

- (18) 津村文彦「イカサマ呪者とホンモノの呪術——東北タイのバラモン隠者リシ——」, 川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店, 2019年, 17 - 40頁。
- (19) 近藤英俊「冒険する呪者たち——ナイジェリア都市部呪医の実践から——」, 同上, 163 - 192頁。
- (20) 浜本, 前掲論文。
- (21) 朝倉無声『見世物研究』春陽堂, 1928年。
- (22) 松山光伸『実証・日本の手品史』東京堂出版, 2010年。
- (23) 河合勝・長野栄俊『日本奇術文化史』日本奇術協会, 2016年。なお, 当初は非売品であったが, 加筆修正版が東京堂出版から2017年に出版され, 一般販売されるようになった。
- (24) 『南蛮寺物語』(1768年), 『南蛮寺興廢記』『切支丹宗門来朝実記』などに登場するキリシタンについて言及がある。後者の2冊は年代がはっきりとはしないが, 長野はいずれの本についても, 江戸時代中期から後期の, キリシタンがほとんど国内からいなくなった時代の作品だと説明している。
- (25) 香川雅信「日本人の妖怪観の変遷に関する研究——近世後期の「妖怪娯楽」を中心に——」総合研究大学院大学学術博士論文, 2006年。
- (26) 横山泰子「明治期の妖怪手品」『法政大学小金井論集』第1号, 2004年, 121 - 142頁, 同『妖怪手品の時代』青弓社, 2012年, 同「秘術の公開——江戸時代の手品本にみられるまじないについて——」『国立歴史民俗博物館研究報告』第174号, 2012年, 43 - 55頁など。

参考文献

○日本語文献

- 朝倉無声『見世物研究』春陽堂, 1928年。
- 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜：宗教・国家・神道』岩波書店, 2003年。
- 江川純一・久保田浩「「呪術」概念再考に向けて——文化史・宗教史叙述のための一試論——」, 江川・久保田編『「呪術」の呪縛(上)』リトン, 2015年, 7 - 44頁。
- 江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛(上)』リトン, 2015年。
- 『「呪術」の呪縛(下)』リトン, 2017年。
- 香川雅信「日本人の妖怪観の変遷に関する研究——近世後期の「妖怪娯楽」を中心に——」総合研究大学院大学学術博士論文, 2006年。
- 河合勝・長野栄俊『日本奇術文化史』日本奇術協会, 2016年。
- 川田牧人「あとがき」, 白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院, 2012年。
- 「序」, 川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店, 2019年。
- 川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店, 2019年。
- 久保田浩「近代ドイツにおける「奇術=魔術」——奇術とスピリチュアリズムの関係に見る〈秘められてあるもの〉の意味論——」, 江川・久保田編『「呪術」の呪縛(下)』リトン, 2017年, 317 - 354頁。

国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第4巻，吉川弘文館，1984年。

— 『国史大辞典』第9巻，吉川弘文館，1988年。

近藤英俊「冒険する呪者たち——ナイジェリア都市部呪医の実践から——」，川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店，2019年，163 - 192頁。

白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院，2012年。

津村文彦「イカサマ呪者とホンモノの呪術——東北タイのバラモン隠者リシ——」，川田牧人・白川千尋・関一敏編『呪者の肖像』臨川書店，2019年，17 - 40頁。

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第2版，第4巻，小学館，2001年。

浜本満「いかさま施術師の条件-治療実践における見掛けの構築について-」『九州大学大学院教育学研究紀要』第12号，2010年，49 - 84頁。

松山光伸『実証・日本の手品史』東京堂出版，2010年。

横山泰子「明治期の妖怪手品」『法政大学小金井論集』第1号，2004年，121 - 142頁

— 『妖怪手品の時代』青弓社，2012年。

— 「秘術の公開-江戸時代の手品本にみられるまじないについて-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第174号，2012年，43 - 55頁。

渡邊敏朗，E. R. Skrzypczak，P. Snowden 編『新和英大辞典』第5版，研究社，2003年。

○英語文献

Al-Gailani, Salim, "Magic, Science and Masculinity: Marketing Toy Chemistry Sets," *Studies in History and Philosophy of Science*, vol. 40, 2009, pp. 372-381.

Brian, Reed, "Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic (Review)," *Modern Language Quarterly*, vol. 65.4, 2004, pp. 605-608.

Buckland, Warren, "Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic (Review)," *Theatre Survey*, vol. 45.1, 2004, pp. 135-137.

Cahn, Peter S, "The Re-Enchantment of the World: Secular Magic in a Rational Age (Review)," *Anthropological Quarterly*, vol. 82.4, 2009, pp. 1087-1089.

Cuthbertson, Ian Alexander, "Everyday Enchantments and Secular Magic in Montréal," Ph.D. thesis, Queen's University, 2016.

During, Simon, *Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic*, Harvard University Press, 2002.

Goto-Jones, Christopher, "Magic, Modernity, and Orientalism: Conjuring Representations of Asia," *Modern Asian Studies*, vol. 48.6, 2014, pp. 1451-1476.

Landy, Joshua and Michael Saler (eds.), *The Re-Enchantment of the World: Secular Magic in a Rational Age*, Stanford University Press, 2009.

Nadis, Fred, "Modern Enchantments: The Cultural Power of Secular Magic (Review)," *Technology and Culture*, vol. 45.4, 2004, pp. 895-897.

Oxford University Press (eds.), *OED Online*, Oxford University Press, January 2020.

Pittard, Christopher, "The Travelling Doll Wonder: Dickens, Secular Magic, and Bleak House,"

Studies in the Novel, vol. 48.3, 2016, pp. 279-300.

Schultz, Matthew, "Revenant Modernisms and the Recurrence of Literary History,"

International Journal of English Studies, vol. 17.1, 2017, pp. 1-15.